
ボクは白馬の王子様（北の脅威）

都魔子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクは白馬の王子様（北の脅威）

【Zコード】

Z5076G

【作者名】

都魔子

【あらすじ】

独裁者と周りの鳥合の衆を痛烈に笑い飛ばします。西暦2009年4月4日からミサイル発射の日までの全世界の平和を愛する人々とスタンレー・キューブリックに捧げます。ノン・フィクション・ファンタジー。

1 奴隸の育て方（前書き）

故スタンレー・キュー・ブリック監督に捧ぐ

1 奴隸の育て方

西暦2009年4月4日から、『あの』国からミサイルが発射された4月5日までの世界中の人々に捧げます。

だつてボクちゃん、ずっと欲しかったんだよ・・・あれが・・・
ボクを虐める背の高い外国人をやつつける・・・

原子爆弾。

昔から、いつもボク等を虐めてた倭人の国に落としてやるのが夢だつたんだ。

あいつらの祖先はボク等の国から逃げ出した貴族で、そいつらが作つた国のくせに反対にボク等の国をひどい目に合わせた。
建国の英雄と同じ金の卵から生まれたボクちゃんは、あいつらを滅ぼす義務があるんだ。

だからボクは頑張つた。

おとうちやまの育てたこの国を、反乱分子に取られまいと、ボクは頭を絞つてあらゆることをやつたよ。

子供の頃からボクちゃんのために育てられて、何でも与えてボクのゆうことをしつかり聞く子達を使って、ボクは周りを固めていつた。

ボクちゃんはおとうちやまからしつかり学んだよ。奴隸の作り方

をね。

何が一番良い方法かって？・・・うーん、そうだな。

とにかくうんと楽しませて考えさせないとかな？女を『えるのが一番いいみたいだ。ちんぽがようやく立つ頃から好きなタイプを与えてやれば、ボクちゃんを守る仕事の他はセックス中毒になる。そいつの性向を分析して一番会つ女を選んでやるんだ。

ボクが驚いたのは、この国に生まれた高官の息子つていうのは変態が多いことだ。（ボクもそのうちかもしれないけど・・・）

この国を支配する高官の子供つて、生まれた時から我が儘し放題で人を人とも思わない奴が多い。そんな連中がボクちゃんの側近にうつてつけなのだ。

『える側から』M『』Jやつて殺してしまつ奴がいた。やるたびにもみ消してやつたが、ある時、おとうちやまの可愛がつてた高官の娘を勝手にさらつてきて殺つちやつたんだ。

ボクちゃんの腕の見せ所だった。だつて、飴と鞭つて言つじやない。ボクちゃんの非情さも見せつけなきやいけないつておとうちやまが言つてたんで、ボクは実行した。

その親とみんなの前で公正な裁判をして、そいつの皮を生きたまま剥いでやつた。

それでその高官も、ボクをあまりよく思つてなかつたその高官の娘を、そいつに紹介したのはボクなんだけどね。

次は国民の統治法だ。

国民は衆愚に限る。扇動しやすく愛國心も持たせ安い。

だが全ての国民を幸せにするなんてのは帝王のやることじゃない。そんな馬鹿をやつたら民主主義なんて悪魔が頭をもたげてくる。愚の骨頂。[冗談じゃない。]

まずボクは兵隊の上層部を幸せにした。ボクのお馬鹿な側近にしてやつしたことと同じように、大特権を与えて、裕福、贅沢な暮らしをやせる。

それから軍の中層部から、時々上層部に入れるラッキーな奴を選ぶんだ。特に下層民出で瘦せた兵士が良い。何でも良いから理由をくつつけて、ボクちゃん自身が賞状を手渡し声を掛けてやる。

ボクは満面の笑みを湛えてそいつと握手し、嘘かも知れない功労（側近達が一生懸命見つけてくれるのは分かるが、時々明らかにおかしいものもある）を労い、握手してその後誇らしげに拍手をしてやる。

まわりの奴らはそれを見て、ボクちゃんに忠誠を誓えば幸せになると信じるんだ。

ボクちゃんの周りは贅沢三昧をしきて腹が出てる連中ばかりだけど、僻地の農民は貧困し餓死する者もいる。でもそれは、別に国にとつて重要な問題じゃない。

重要なのは反乱が起きない様に監視し、何も情報を与えないこと

だ。

救いがないということを条件付けしてやるのさ。

ちょっとでも逆らえば警備兵に発砲させて処刑させる。警備兵も同じ様な村の出身だが、人民の反乱に対する恐怖と、反乱が起きた場合の体制からの罰の重さを教育して、脳髄が麻痺させてある。

そういう兵士は無意識に引き金を引く様になる。自分に逆らう生身の人間の返り血を浴びると、今度はそれが快楽になる。感情のないロボットの誕生だ。

そして彼は下層民の憎悪の対象となる。

後戻りは出来ない。

ボクはその警備兵を褒め称える。一石二鳥だ。

飢え死にした子供の写真を撮つて、飢餓を理由にすると諸外国の福祉機関が食料を集めてくれる。軍の中層部にそれを横流しする権限を与えてやる。またまたボクちゃんへの忠誠が集まる。

あつたまいい！ボク。

3 夢と恐怖

とつくんとつくん・・・

くくつ

とくとく・・・

ボクちゃんは夢を見ていた。ケーブルの中を伝つてアレがタンクに入つて行く。

くふ

ボクちゃんは寝ながら笑つた。横には夜通しボクを喜ばそうと一心に奉仕していた女が疲れ切つて寝ている。糖尿病に腎不全、ありとあらゆる成人病を持つボクちゃんがそう簡単に満足するわけがない。

「同志閣下！」

無粋な大声でボクは目覚めた。いつもならこんな無礼者はすぐ銃殺だが、今朝はボクは機嫌が良い。

「そう、ボクは君たち人民の同志だ」

いつもの儀礼の取り交わした。おとうちやまが始めたつまらない習慣だが今朝は別。

「常に人民を想い、人民のために命を掛けて下さる總統閣下！万歳！」

彼が上を向いて唾を飛ばしながら暗唱するのを辛抱して、そして

聞いた。そう威厳を持つてね。

「終わったか？」

ボクのお気に入りの貧民の息子、近衛兵のサム・ゲタンが自信有りそうに言った。彼もボクちゃんを喜ばせる情報を持ってきたので得意満面だ。

「は！燃料を注入が終わりました！」

くく・・・よつやく飛ばせるーアレを！ボクちゃんの子供の頃から夢！

何故、貧民の子がボクの衛兵かつて？

ボクは高官の息子を側に置いたりしない。クーデターが恐いからね。だから彼らと張り合わせる様に貧乏人からボクが引き上げた若者を置いてるのさ。言つたでしょ！帝王学の成果、一石二鳥政策つてね！

そのころ、カリフォルニアの「トズ」ーランドのシンシテレワ城の地下には一人の若者が収監されていた。

この世界最大の遊園地に特別に作られたCIAの支部だ。

若者は青くなつたり赤くなつたり、何もない広い部屋の尋問室の真ん中の大きなテーブルの前に一人座らされている。その前を如何にも残忍そうな背広姿の大男が腕組みをして立つている。

「ぼ・・・僕を誰か知つてるんだろ？僕を自由にしたほうが身のためだぞ！CIAめ！」

ふてぶてしさを装いながら、だらしなく太つた無精髭の若者が言

つた。

だが背広の男は感情のない目でじろと若者を睨んだ。彼の肉体を見て、故国では側近に囲まれて親分風を吹かせている若者は、自分がいかに貧弱な肉体をしているか感じていた。

「俺はCIAじゃない」

抑揚のない声で男は答えた。

「残念だが、ここにCIAはいない。俺はNSA（国家安全保障局）から来た！お前をこの世から消し去つてもいいんだぜ！」

ああ・・・NSA・・・国家保安のためなら殺人も許される組織・・・！

若者はびくつとしたが、必死の勇気を振り絞つて言った。・・・ああ、やつぱりお遊びなんかで来なきや良かつた・・・殺されるのはいやだが、帰つてからパパに怒られるのも恐い・・・

「僕はただの旅行者だ！」

NSAの男は、言い分を変えた若者にやつと笑いながら、テープルの上に置いてある数々の書類の一つを取り上げて言った。

「偽造ビザで入ってきた奴がただのトラベラーかい？」
そのビザを二つに破いてぽんと若者の目も前に投げる。

「このドライバーライセンスも下手な細工をしたもんだ・・・こんな低品質の材質をどこで見つけたんだ？」

男の怪力はプラスティックの板を難なく引き千切つた。

「べ・・・弁護士に電話させてくれ！」

男は若者が所持していた紙幣を取り上げると、突然鬼の様な表情

に変わった。凄い力で手の平と一緒に机に叩き付けた！

そして大音声で怒鳴った。

「合衆国の偽札を持つて女を買いに来たのか！」

「ひつ」

若者は、こんな恐怖を覚えたことは生まれてこの方初めてだった。ミッキーの金文字が印刷してあるTシャツは汗でぐつしょりだ。若者は危うく失禁するのをよつやく堪えた。だが身体の震えが止まらなかつた。

「お前のホテルの部屋から麻薬も見つかった・・・南米産じゃない、北朝鮮製のな」

若者の身体はぶるぶると無意識に震えだし止まらなくなつた。

「お前は！」の国ではひき立で粉々にされても誰も文句は言わない

高官の息子である若者は、国民には禁止しているアメリカの漫画を溺愛していた。全く同じ場面が確かあつた。シン・シティとかいうピカレスクバイオレンスコミックだ。その漫画ではその悪人は本当に粉々にされてしまう！

4 長官への電話

若者は明かりを消された尋問室で椅子に座り一人で嗚咽を漏らしていた。

確かに密かに中国から中東を回つてアメリカに遊びに来た。誰にも知らせずに。賄賂にものを言わせてここまで来た。
それが却つてこの若者のアメリカでの存在を否定する事になつていた。

帰つて、同じ高官の息子である友人達に自慢しようと、誰にも分からぬ様に行方を眩ませた筈だ・・・
世の中を甘く見ていた・・・いや、それを教えてくれなかつた教師が悪い！無事に帰つたら死刑にしてやる！

NSAは彼が入国した形跡など跡形もなく消し去るだろう。我が儘で知性が乏しく育つた若者は、自分と同じ荒涼とした心風景を持つた人間に敏感だった。

あの男はただ者じゃない。

故国の軍隊の中にある暗殺隊の連中をよく知つている。あんな男ばかりだった。感情の全くない、機械の様な刺客。
もう終わりだ・・・ママ・・・」免。

若者が鼻汁をすすり上げているとNSAの男が入ってきた。若者の携帯を持って。

＊＊＊＊

ヒーを長官室でゆつくりと味わっていた。机の電話が鳴る。秘書が無機質な声で告げた。

「息子様からお電話が入つてます」

ナムルは驚いて、

「秘話にしてつないでくれ」

「でー（はい）」

ナムルの耳には、泣き咽びながら叫ぶ様にしゃべる男の声が飛び込んできた。

「パパ！ひっく」

ナムルはぎくっとして、ドアに飛んで行き、開けると秘書に命令した。

「ちょっとどこかで休んでいてくれ。1時間ほどな。誰も入れない様に鍵を掛けて」

秘書が出て行くのを確認すると、電話に戻り、ボリュームを少し絞つて、電話に口を近づけて囁くように言った。

「クッパ！どこにいる！何故黙つて旅行に行つた！」

「ひ・・・パパ・・・ご免なさい・・・助けて・・・

「何！」

するどがさがさとノイズが入り、低い男の声が電話から流れた。流暢な高句麗方言だ。

「チエ長官ですね？」

「誰だ！お前は！息子を出せ！」

低い声は暫く沈黙するとまた話し出した。

「ここはアメリカです。息子さんは不法入国、麻薬所持、偽造金券の罪で当局に拘束されました」

「貴様！・・・これは外交問題になるぞ！」

低い電話の声はちつちつちと舌を鳴らした。

「政府は知りませんよ。息子さんの入国記録もありません。息子さんは「」」では誰でもないのです」

ナムルは声に詰まつた。浅く刈り込んだ髪の額から汗が一筋垂れ、制服の襟に落ちた。

「どうすれば良いんだ? どうすれば息子を解放してくれる?」
「あることを教えて貰いたい」
「な・・・何だ? 儂にも知らない」とはある…」
「知らなければあなたの息子は生きながら寸刻みになるだけだよ。國民がやる事じゃない。農場の豚たちかな?『羊たちの沈黙』を知つてるだろ?」
「それがアメリカのやることか! 恥を知れ!」

電話の声は笑つた。

「あんた達に言われたくないね。我が國には色々な人種がいるが、お前達のような國^{くに}盜^{ぬすつと}人の下品な心を持つている人は一人もいない!」
チエは黙つた。儂だつてそんなつもりで若い頃から生きてきたつもりじやない…」

男の声がまた流れた。今度はうつて変わつて優しい声色になつていた。

「・・・貴方もやり直せるようにしよつ。アメリカに渡つて息子さんと再会出来るようにしよつ。一ミリオンドラー(1億円)の資産を用意する。一族みんなで来るが良い。戸籍もキャリアも全て新しい良い物を上げるよ。必要なら顔も全員整形してね」
チエは苦しい声で言った。

「・・・何が知りたいんだ?」

「今打ち上げようとしているミサイル、いや・・・北朝鮮初めての
偉業、通信衛星の中身だ」

5 スカイネット

東京の首相官邸に深夜、アメリカからホットラインが掛かってきた。

首相の粗相は慌ててベッドの上で、知らせを持ってきた宿直の外務省職員に怒鳴った。

「通訳の富田さんを呼べ！叩き起こして連れてこい！英語で直接電話なんて俺に取っちゃ未曾有（？）の危機だ！なんちやつて」

10分後、粗相は真っ赤なバスローブの腰に長い帯をぐるぐる巻きにして、執務室のゴシック調の椅子にふんぞり返っていた。側には欠伸をする同時通訳の富田嬢と、ジョギングする時のジャージを着ている防衛庁長官の不渡がいた。

「ハバマ大統領、お待たせしました」

粗相が出来るだけ威厳を持つた低い声でスピーカーホンに呼びかける。富田がその途中から早口で英語に訳し出す。

大統領が詫びた。

「ミスター・ソソウ。まだそちらは夜ですね。とんでもない時間に申し訳ない」

「いやいや、貴方と私の仲ではないですか。エニタイム・ウエルカムですよ」

「・・・イツ・ノ・・プロブレモ。ビツーイン・コー・・アンド・ミー。イツデモ・コイコイ」

「・・・これは緊急の用事です」

粗相は内心、やれやれと思いながら、

「はい、なんでしょう」

「実は、我が国の NSA が掴んだ情報ですが……今、『北』が打ち上げようとしているミサイル」

「彼らは『通信衛星』と言っている奴ですね。やはりミサイル演習でしたか！」

「どうもそれ以上のものらしいのです」

「……？」

一瞬、通訳の声の後に沈黙が流れた。空気が重々しくなった。粗相がゆつくりと切り出す。

「……一体何なのです？」

「水爆です」

不渡が叫んだ。

「な、何だつて！ いつ奴らはそんな物を！」

「どこにでも天才はいるのです。あの『王子』はそれを見つけ出し、金に糸目を付けずに研究させたらしい。偽の米ドルで設けた金でね」「一体どこに落とすつもりだ……？」

ハバナが言う。

「それも一つじゃないと言います。十数個の弾頭が載つているらしいのです。一つ一つが自由圏の国々の首都に標準がプログラムされています」

粗相は椅子から身を乗り出した。富田が緊張して訳す。

「宣戦布告ですか！？」

「ウイ・ガッタ・シチュエーション・ヒア？」

大統領の声は震えていた。

「どうも核の威嚇のために打ち上げるそうです。しかし……」

三人の日本人は声を揃えた。

「しかし？」

「本当に恐ろしいのは、それが彼らがスイッチを抑えることなく予期なく発射されることです」

粗相は如何にもアメリカを知っているぞとばかりにこう言った。
「どういう意味です？あ・・・そうか！全自動化だ！『スカイネット』みたいな！」

意外な答えが地球の裏側から返ってきた。

「・・・違います。彼らの意志とか機械の意志とは全く別の、ランダムな発射の可能性があるのです」

「ランダム！？」

「彼らには、我々の国の産業が標榜する様なカスタマー・サティスファクション（顧客の満足）の概念はありません。國中の産業が、いい加減な製造を行つてゐるのです。一つ、目標があるとすれば、あの總統を喜ばせて恩賞を貰いつつぐらいです」

「つ・・・つまり、品質不良と・・・？」

「N S A が彼らの情報局からミサイルのデータを吸い出しました。長い間、アメリカの最高のコンピューターでアクセスコードを割り出そうとしていて駄目だったのですが、分かつてみると、『ジュゲムジュゲム・・・』みたいな一万ビットのアスキーコードでした。一度アクセスコードが分かれば、セキュリティなど何も掛かっていない旧世代のネットワークだったのです」

ジュゲムジュゲム・・・は富田の呴嗟の名訛だつた。二人の英語が話せない日本人は瞬時に理解した。だが普段使う人間はどうやって打ち込んだのだ・・・？謎の多い国だ。

「そのデータから分かつたのですか？」

「ええ、専門家が見てびっくりです。あんないつ誤動作するか分からぬシステムは、作ろうと思つても作れるもんぢやないと言つてました」

不渡が恐る恐る聞いた。

「つまり、核弾頭の標準も・・・？」

皆の表情がその言葉に固まつた。

「・・・ミスター・ディフェンス（不渡のこと）。貴方は鋭い。そうです。つまり、狙っていない所に着弾することです！」

日本人は合唱した。

「オー・マイ・ガッデー！」

6 日本立つ！

「す・・・すぐ国連を！」

粗相はいつもらしくなく頭脳が明晰になっていた。まだ4月というのに汗をじつぶりとかいていた。

「ミスター・ソソウ。すでに世界15カ国の首脳がオン・ラインになつてます。15分後にテレビ会議を緊急衛星中継で行いますので、用意をお願いします」

大統領は電話を切つた。

粗相は首相官邸の地下にある内閣府（旧内閣総理府）の非常時保安中央政府室の議長席に座つていた。

大きな円卓には、それぞれの席ごとに17インチの液晶パネルが机の中から開く様になつており、座つた者の手前をスライドすればキーボードやマイク、小型カメラがせり出してくる。

部屋の周囲には50インチの液晶パネルが20個張り巡らされており、それに同じ様な会議室の様子がリアルタイム衛星通信で映し出されていた。

パネルの隅には『USA』、『UK』（イギリス）、『RF』（フランス）などという各国名が表示され、その国の代表者か、その会議場の全体が映されている。

粗相の横には富田嬢がぴたりと付き添つてあり、『JPN』と表示された真向かいのパネルにその一人の姿が映つている。

円卓には閣僚が集まっているが、所々にまだ空席があつた。

粗相は机の上で結んだ両手の指の上に顎を乗せてカメラに語りか

けた。

「日本は用意が出来ました」
粗相や閣僚が片耳に付けたイヤホンに各国の代表の誰何が始まつた。

ここでの言葉は英語であり、日本と中国だけが本国語で話し、通訳が訳していた。

米国大統領が先頭を切つた。

「各国の皆さん、我々が入手した『北』のミサイルの情報は先にお知らせした通りです。ここにその証拠があります」
閣僚の前のコンピュータ・ディスプレイにさーっとミサイルの図面や、弾頭の配置などが流れた。

防衛庁の技官が持参した21インチの液晶パネルに、データを映し出し細部に食い入る様に見入つてゐる。

「確かに弾頭が21個確認出来ました」
彼は、度の強い眼鏡を人差し指で上に上げながらマイクに小声で報告した。

「フランスは国連から彼らに警告を下され、発射を思ひ止めた」とを提案します」

フランス大統領が冷静に言った。

「それでは遅い！」

「彼らはもうすぐ秒読み段階に入る！」

各国の代表達が口々に叫ぶ。

「ミサイルが上空を直接通る日本はどうします？」

中国の第一書記の子均等が、抑揚のあるマンダリン（中国標準語、北京語）で話しかけた。

粗相に皆の視線が集まり、各国の国家会議室はしんとした。

粗相は前の首相の辞任により、消去法で首相になつた男だ。

普段の言動から批判を浴びてゐる粗忽な首相として海外でも有名だ。もともと首相が替わつても何も対外的には変化しない日本の代表など各国にとつては誰でも良いのだ。どうせ憲法九条を持ち出して当たり障りのないことを言つだらう、と皆思つていた。

粗相は暫く考えていたが、顔を上げると、沈鬱な顔でしゃべりだした。

「皆さん、日本は勿論、憲法九条で侵略行為のある時以外は、自ら他国を攻撃出来ません」

防衛大臣が額に汗を流しながら頷いた。

やつぱり、というような空気が流れる。

粗相は続けた。

「しかし、これは国の脅威であります。引いては全世界への「おおつとどよめいた。いつもと違うといつて、田で各国の代表者達は目を見合わせた。

閣僚達は落ち着かなかつた。

（一体・・・首相は何をいつつもりだ！下手をすれば我が政党は潰れる！）

「私は今、世界人として提案します」

粗相は威厳を保つた態度で周りを見回した。閣僚が何も言つなどいう目で粗相を睨んだ。

だが粗相はひるまなかつた。もともと田立つことが好きでスタンドプレーも多い。そのため失言も多いが。しかし粗相は一つの決心をしていた。ここで世界に向けて思う様にする。俺はそれが出来る

のだ。粗相はすうと深呼吸をして言った。

「金前日を北朝鮮国民への搾取・虐待、および国際平和への恐喝・
背信の犯罪者として捕らえることを！」

一瞬、耳が痛くなる様な無音が広がった。そして次の瞬間、割れ
んばかりの喚きが湧き上がる。

「なんだって！証拠はあるのか！」

「確かにある！イスラエルやマカオの銀行には彼の個人的入金の記録が
有るはずだ！それを調べ上げれば奴は終わりだ！」

粗相は声を大にしてまた言った。訳が始まるとまたしんとした。

「彼が国家の財産を私物化していることは国家の統制法を見れば明
らかです。彼が作った法律が法律でないことを証明すれば良いので
す」

これは『北』問題を調査した時に、法律学者の一人が言ったこと
だ。この国家篡奪の当事者は自らの法で滅ぶということだ。

粗相が言つ。

「今、国連総長がいらっしゃります。ここで判断しましょう。後か
らではもう遅いのです」

会議を主導しようとしていたアメリカ大統領は、意外な流れに慌
てていた。

日和見でアメリカの核の傘下にいるひ弱な日本人に、世界の運命
を決める様な動議を出されるとは心外だ！

「で・・・では、ここで方針を決定しましょう・・・・・国連の・・・・・」

「アメリカには今まで調べた全ての『北』の軍事基地・施設の情報

を出して頂きましょう

粗相の横やりにハバナは絶句した。

「えつ！・・・いや、そうですね・・・」

粗相が激しく言った。

「もう時間がないのです。我が国はイージス艦を派遣し日本海沿岸の軍事基地を無力化します。各國はそれぞれ出来る限りの戦闘機、爆撃機を配備し、韓国・中国は北からの難民を一時受け入れ、権力者が逃げない様に監視して頂きたい」

「中国は『北』とは友好関係を結んでいる！そんなことは出来ない！」

子均等が叫ぶ。

粗相がたたみかける様に言った。

「第一書記殿。考えて下さい。もしミサイルが打ち上げられれば世界各國は大混乱します。ミサイルの軌道上、確かにあなたの国は被害が小さいかも知れない。しかし、我々の国民が泣き叫んでいる時にあなた方は知らんぷりをするのですか？水爆の恐ろしさをご存じでしょう？」

「戦後、日本国が国際社会でここまで主導権を取ったことがあるのか？」

「兵は拙速を良しとするといいます」

子均等は苦虫を潰した様な顔をした。『孫子の兵法』だ。確かに彼がここまで上り詰めたのは、政権の状況を見極め、速いスピードで動いてきたからだ。それは現実社会で真理なのだ。水爆という立派な理由で国民も納得するだろ？

「出来る」ことをやる!」

「それが世界平和を保つことになるなら」

主要是国々の代表は口々に自分に言い聞かせる様に言い出した。

粗相は内心、得意だった。高揚していた。今、俺は国際社会、いや全人類の歴史に名を残そうとしているのだ! 次の名言で!

「道さん!」これは世界いや人類史上始めての『義』の戦争となります!」

隣の通訳の富田は一瞬悩んだ。『義』! なんと訳せば良いのだ!

「レディース・アンド・ジョントルマン! ディス・イズ・ザ・ファースト・ワールズ・オア・メンズ・ウオー・ジャスト・フォー・ロンシャンス(良心)!」
(きやーつ! 我ながら名訳だわ! ジャステイス(正義)じゃ月並みだものね!)

粗相は興奮のあまり腹がぶるぶる震えるのを抑えられなかつた。鬼瓦の様な顔は上氣し真つ赤になつていた。

7 博士の奇妙な愛情

オイ・キムチ軍曹は金玉原周辺の警戒をしていた。

彼の属する陸軍特別師団が守る広大な軍事施設は、そこに代々住んでいた村々を焼き払って造ったものだ。ぐるりと頑丈な鉄条網が張り巡らされ、彼が受け持つ報心十人隊はその南側の入り口を守っている。

オイは得意満面だった。北部の貧民層から出た彼は最近、總統から国民英雄賞を受けた。そして一等兵から軍曹に昇進し、部下を与えた。

前に務めていた地域に農民が反乱を起こした。横暴な兵隊達が起こしたレイプ事件が発端だつた。食べ物を食い散らかして笑いながら歩く兵隊の後ろに、時には大人までが付いて回つて、捨てられたものを争つて食べた。慢性的な飢餓が続いているのに軍隊は容赦なく収穫を徴収した。税金をちゃんと納めているのに、臨時徴収と書いて銃を持つてトラックで奪いに来るのだ。

我慢出来なくなつた農民が手に棒きれを持つて向かつてきた時、オイは機関銃で十数人を撃ち殺したのだ。

總統様と握手してその功績を讃えられた時、彼はこの指導者に命を捧げる決心をした。ぶくぶくに太つた醜怪な小男を、周りの者が『愛らしい總統様』などとうつとりとして呼ぶのが始めは信じられなかつたが、今では彼のことが神の様な優しいお方として脳裏に刻まれている。

その時、隊員が走つてきた。

「隊長！ 大変です！ ここに棲んでいた農民が鎌や鍬を持って集まつ

てきました！」

「今、ここには總統様のミサイルがあることを知つていての反乱か！」

兵士は驚いて、

「あ・・・いえ・・・それは農民には知らされてませんが・・・この食料庫を狙つて集まつた様で・・・」

ちつと舌打ちするとオイは命令した。

「入り口の前に横一列になつて発砲準備だ！總統様に我々の忠誠心の見せ所だ！派手にやるぞ！皆殺しにしろ！口ケット弾も用意しろ！」

「

部下の兵士は喜び勇んで敬礼した。

「でーっ！」

＊＊＊＊

ボクは怒りに震えていた。

目を掛けていた情報局長のチエが西側に情報を流した！

ボクは全ての閣僚と局長を呼び出した。この国の組織を動かしている連中全部だ！

円卓に全員着席していたが、ボクが入つていくと起立してパンパンと拍手をして迎える。

だが、ボクの表情を見ると拍手が止まつた。こういう顔をしているボクは恐ろしい鬼となるということをよく知つていてるからだ。ボクの後ろには、ボクのために命を捧げてくれる青年将校が、ボクを守るために数人付いている。

ボクが入つてきたドアの反対側のドアがぱんと開いて、一人の兵士に腕を取られ引きずられてチエが入ってきた。手と足には鎖の枷

が嵌っている。

チエは円卓の切れ目から中に放り出され、丸い空間になった床を這つてボクの方に来た。情報局の制服の階級章はちぎり取られ、涙に濡れた丸い顔には痣が幾つもあつた。

「總統様・・・」

チエは震える哀れな声で懇願した。

「お許し下さい・・・私は罠に引っ掛けました！息子が汚いアメリカに捕らえられ、殺すと脅かされたのです！」

ボクが指を鳴らすと、スピーカーから電話で話す声が聞こえてきた。アメリカのNSA局員と名乗る男の朝鮮語での会話だ。

チエは恐怖のために目を見開き釣り上げてがたがた震えだした。

『秘話』電話を使つたはずがどうして録音までされているのか分からなかつた。

この国で暗号や秘話機能を使って通信することは、ボクちゃんに全て聞かれるということなのだ。くふーこの秘密はボクと人の男しか知らない。その男とは・・・後で紹介するがここに来ている。

誰も使えなかつた西側のスーパー・コンピュータを一人で使いこなし、水爆の設計をする傍ら、この機械を人間が人間を支配するための悪魔の機械として稼働させた。

昔、チャウシェスクにあげたIBMのコンピュータで動く総国民の思想監視プログラムをプログラミングしたのはこの男だ。膨大な国民の一人一人のリストを『ポインター』で短時間に呼び出すことが出来るという、ボクちゃんでも理解不能のことを言つていた。コンピュータに『^{ポインター}指先』があるのか！？

チエとNSAの男の会話から、都合の良いところだけ放送した。

『分かつた・・・アクセスコードを教えるから、すぐ私と家族を脱出させろー。ワニ＝コオンドル、忘れるなよー。』

ボクは怒りと威厳をうまく調和させてチエを見下して言った。

「・・・これはお前の秘書が、お前の行動を怪しいと考えて、決死の覚悟で秘話電話を録音してくれたのだ！・・・お前に知られれば自分が殺されると言うことも忘れて忠誠を示してくれた！後で彼女に私は心からお礼をしよう」

ボクは彼らの会話からお楽しみを考えていた。

「これでチエの後釜に座れると、副長官のカンがにやにやしながらボクに聞いた。

「總統様！で、どうしますか？」の反逆者を？」
「」いつの一族を全部捕らえて豚に食わせてやれ！『ハン＝バル』
の一場面の様にな・・・」
「ひええつ！・・・」

「そしてミサイルの発射を早めるんだ！あとどのくらいだ？・ストレンジラブ博士！」

ストレンジラブ（奇妙な愛情）と呼ばれたのは、実名がヨンという車椅子に座つた若者だった。閻僚の視線が彼に集まつた。サングラスを掛け、人民服に黒いブーツ、黒い手袋をしている。別に足が悪いわけではないのに、車椅子で移動している。いつも引きつた笑い顔をしている。これも演技だ。彼の好きな欧米のスターを始終、真似てているのだ。彼は『ストレンジラブ』と呼ばれないと返事をしない変人だ。

ぎりぎりと軋む様な声をわざと出しながらヨンは口を歪めながら話した。周りの閣僚達は気味の悪そうな顔をして見ている。いつも誰かの真似をしながら總統に仕えているこの若者が、何を考えているか知るものは一人もいなかった。

「閣下・・・燃料は積み終わり、今最終確認をしております・・・ぐつぐつぐ」

嫌悪を催す笑い声を出した。レイ・チャールズ（2004年に没した黒人のR&B歌手）のように身を捩らせて笑う。

ボクちゃんは、朝鮮人のくせにアメリカ映画が大好きなこの天才を飼つて、時々失敗したんじゃないかと思う。でも確かにこいつは天才だつた。ボクちゃんの夢を次々に実現した。そして水爆を作ってくれた。

「ハイ・・・ル・・・！」

彼のうんざりする演技が始まった。みんな辟易している。だが、ボクが許しているので何も言えない。

ヨンは右手を硬直させて、指先を伸ばし上に上げようとした。そして彼の左手がまるで別の生きものの様に右手が上がるのを抑える。そして右手と左手を争わせた。その時の彼の顔は無邪気な子供の様だ。

8 歴史的な日

オイ・キムチ軍曹は前に十人の部下を片膝突かせて機銃を構えさせていた。

夕闇の冷たい風が流れる基地の前の草原を、数十人の幽霊の様に痩せ細り、ボロを着た農民が現れた。前部にいる男達は確かに鎌や鍬、棒を持っていたが、後から続く者達は女、子供も含めて何も武器らしきものは持っていない。

だが、恩賞に目が眩んだ人でなしの兵士どもは、そんな事は意に介していない。一人も良心を持った者がいないのだ。どうしてこんな国が出来たのだろう？彼らはただ反逆者どもを殺しまくることを楽しみ、その血と悲鳴に飢えていた。

「撃てーっ！」

オイの掛け声で兵士が一斉に発砲しだした。

「ぎやーー！」

前にいた農民がばたばたと倒れる。後ろから来た者達は逃げまどつた。

「ロケット弾を打ち込め！」

オイが命令すると、兵士達は機銃を前に置き、一人がチームになつて、ロケット弾のランチャーを一人が担ぎ、後ろに回つた兵士が前の兵士のヘルメットを叩く。

五条の光りの筋が流れ、暗闇に吸い込まれた。

農民が逃げ散った草原のあちこちで光つた。そして凄まじい爆音が続けざまに響いた。後ろの兵士は山と積まれたロケット弾を取りに行き、また装填した。

＊＊＊＊

全世界は目を丸くしてテレビを見入っていた。

イスラエルのハツカーが、アメリカの軍事衛星の信号をハツキングして、その映像をロイタ通信社に回したのだ。

ロイタはそのハツカーにイスイス銀行の口座を作つてやつて数ミリオン・ユーロを振り込んだ。

インターネットにも配信され、自由圏の各国のテレビ局が臨時放送をした。

国家で運営されている中国進化社の幹部達は大あわてで共産党幹部に伝えた。子均等の携帯が鳴った。国際会議が終わり、どうするか頭を悩ませていた子均等は即座に決断した。

「その映像を国営テレビで流すのだ！」

テレビあるいはインターネット配信で世界中の視聴者が見たものは・・・

人の体型が分かるほどの高解像度で衛星から映された、オイ達の農民虐殺の場面だった。

「きやー！」

「ひ・・・非道い！」

横並びの兵士が一斉に射撃し、ゾンビの様に集まつた農民達が倒

れていた。そして二人一組になつた班から発射されたロケット弾。

上から見るときれいな扇状にロケット弾の曳光が見えた。そして五つの丸い光りの球体が。

さつき確かに五体満足の人間が走っていたのに、爆発の後はその跡形もなかつた。

「こんな事が許されて良いのか！」

「もう天安門はご免だ！即刻止めさせろ！」

各国の庁舎は夜昼にかかわらず国民からの電話が殺到した。日本でも内閣府にメールがスパムの様に送られた。

粗相はＮＨＫに臨時会見の要請を出した。

ミサイル騒ぎに待機していたテレビ局の動きは速かつた。

一時間後には総理官邸には中継車が進退出来ないほどに詰めかけ、会見室はコンピュータ室さながらの配線の束が敷かれ、その流れは総理が座る中央前部の机に集約している。

もう閣僚の誰も粗相の邪魔をする者はいなかつた。後でどうなるか分からぬ。

粗相と共に永久に議員生命を絶たれるかもしない。だから賛成も反対も出来ない。ただ、最高責任者が命じた役割をするだけだつた。

粗相は座るとすぐにしゃべりだした。

これは天命だと感じていた。どうなろうと、今は確かに自分は歴史の渦中に存在するのだ。日本国民全てが俺の一挙一動に見入つてゐる。

やつた！歴史の命ずるままにその役割を演ずるのだ！信長しかり！直江兼続しかりだ！かつこいい！やつた！

「国民の皆さん。まだ朝早くお休みになつておられる方も多いと思
いますが、本日は私はある決断を致しました」

前にひしめく中継スタッフが『ぐくりと唾を呑んだ。彼らもあの映
像を見て、歴史的なイベントを記録しているんだという高揚感を感
じていた。

「我々は六十数年前に、戦争という悲惨な経験をして武力というも
のを捨てました」

いつもは失言の可能性を秘めた彼の言語中枢だったが、今は違つ
た。まるで悟りを開いた様に頭脳が隅々まで働いている。

次々と頭の中で文章を組み推敲し、口が推敲済みの文章を読んで
いる。聖徳太子もこのような境地だったのだろうか？

「しかし悲しいことに世界の国々はその後も軍備を拡張し続けまし
た。それでも軍縮の努力はした。だがある少数の国は不幸にも独裁
者に支配され、共産主義という名の帝国を作つてしまつた・・・」
粗相が背後の液晶プロジェクターのスクリーンを示した。そこに
はあの核弾頭を積んだミサイルの設計図が映し出された。

「・・・これは証拠です。水爆弾頭を21個積んだ衛星型ミサイル
『プルガサリ』です。それが今にも宇宙に打ち出されようとしてい
ます。・・・そして今から遠くない日にそれが最後の審判の様に地
球上に降り注ぐのです」

場内はどよめいた。そしてあの殺戮の映像が映し出された。場内
は静まりかえった。

本当は、重要なのは『品質問題』なのだ。その『品質』が、核弾
頭を『降り注がせる』ことになるのだが、それを言い出したところで
で国民は混乱するだけだと、粗相は思った。

設計図と農民殺戮の絵だけで今は十分だ。情報を隠すと、後で露

呈し飛んでもないことになる。しかし混乱させる情報は出しても無意味なのだ。

「国民の皆さん。一度だけ私にチャンスを下さい。自衛隊を平和のために使わせて下さい。何も人生の楽しみを知らずに、無益に、息絶えていったあの達のために自衛隊を派遣させて下さい。全世界の自由国家・・中国も含みます・・・それが全て『私』の提案を受け入れてくれました！」

やつた、記録された！かあちゃん！俺、歴史に名を刻んだよ！

「国民の皆さん！今は皆さんと連絡手段はありません！ですから、賛同される方は車の警笛を午前七時に鳴らして下さい！それを都道府県市町村の役所が私に連絡してくれます」

官邸の時計は午前六時五十分を示していた。

粗相は会見室の椅子で目を瞑つて待っていた。

冷静に威厳を持つてそこに端座する自分の姿を想像し、それを実行していた。ここで薄日を開けるなどしてはならない。全てを受け入れた仮の様な姿をテレビに映すのだ。

まだ通行人がいない霞ヶ関が次第に明るくなつてゆく。遠いところから警笛の音が幽かにした。賛同の音か・・・それとも前のどじな車に浴びせる攻撃的なブザーか。

ぶつぶー。

次第にその音が重なり合い、大きくなつていく。粗相は刮目した。

その瞬間をテレビは捕らえ、その潤んだ瞳を大写しにした。

それを茶の間で見ていた父親は、新聞を投げ出し表に飛び出した。
「お父さん！朝ご飯ビーするの！」

妻が驚いて叫ぶ。子供達がわーといいながら父親の後を追つた。

その父親はガレージの車のドアを開けた。隣の親父が同じよつて車に飛び乗つたところだ。
先を越されてなるものか！

一斉に静かな住宅街の家々から、車の警笛が鳴り響いた。赤ん坊が泣き出した。今は許してくれ！

都道府県の庁舎から官邸に電話が殺到した！大行政区の数だけ電話が敷かれ、総動員された総務省の職員が寝ぼけ眼で一つづつ担当している。

電話を受けると、プロジェクターのスクリーンに羅列された都道府県市町村の一つ一つの名前が青に反転する。各庁舎は市町村の電話を受けるとその「コード番号を官邸に知らせた。

警笛音が蔓延していると判断した市町村は『賛同』と判断して連絡した。

次々と日本各地の市町村コードが青に反転して行く様をテレビは放送した。

「有り難う御座います・・・」

粗相は国民党に向かって深々と頭を下げた。

9 攻撃

各国でも同じ様な事が起きていただろう。

国の代表者は国民を納得させなければならない。

しかし数多くの国民の意志は通常、まともな事ではない。今まで
は。

偶然、軍事衛星が取った写真が世界の国民の感情を統一してしま
つた。

殺人現場を押さえたのだ。

奇跡なのか、それとも人類は『幼年期』を終える寸前なのだろう
か？

自衛隊の全イージス艦が有事指令を受け、日本海に向かった。北
日本の自衛隊基地からジョンストン戦闘機が飛び立つた。

沖縄、横田に米軍機が集まり、空中給油で欧州のNATOの軍の戦
闘機が飛来した。

韓国以外の各国は空軍のみを送った。

これは『義』のための戦争であり、占領は必要なかつたからだ。
全て空からの軍事基地破壊を目指した。米国は詳細な軍事施設の情
報を提供した。独裁者を排除し国民の手に主権を戻すのだ。

『プルガサリ』の発射基地は北朝鮮の内部にある。そこまで行き
着くには何十もの対空火砲や迎撃ミサイルの網をくぐり抜けなけれ
ばならない。

＊＊＊＊

アメリカ空軍のトップガンのトムは愛機のF22で沖縄を飛び立つた。

『ラプター』と呼ばれるに相応しい勇猛な機体をしているステイルス戦闘機である。

彼の役目は超音速で『ブルガサリ』まで一直線に飛び、そこまでの軍事施設の写真と必要ならば攻撃をして無事帰つて来ることだ。彼が逐一衛星を通して送る情報をもとに後方部隊が一つ一つ基地を潰していく。

勿論、F22が三機チームを組み、お互いを守りながら航行する。

上官の部屋に呼ばれた時、トム以下三名はガムをくちゅくちゅ噛みながら、命令をにんまりして聞いていた。三名とも自身で暴れ者として有名なパイロット達だ。

（へへ・・・これで俺も英雄だぜ！）

死ぬ危険など屁にも思わない連中だった。

雲の中を疾風の様に飛ぶのはいつも爽快だ。

「こちら、ラプター・イーター。そろそろ降下する」
三機は首を揃えて高度を下げた。

独裁国家の黒く広がる土地が見えてきた。山野が広がる。畑や細い道が繋がる草原の上を飛んだ。

農夫が何事かと見上げた。

有事とは思えないのどかな風景だ。

「この国、何もないぜ・・・」

トムが呟いた直後、

「ラプター・イータ1、前方に敵機」

相棒の無線が飛び込んだ。

「旧型中国製戦闘機確認！」

「戦闘態勢に移れ！」

「散開せよ」

次々と指令が飛ぶ。

トム達のF22は速度を緩めることなく敵戦闘機に向かつた。標準機は敵機の一つにロックした。トムの親指が機銃の安全キヤップを押し上げた。

どどんどんと身体を震わす機銃の反動。赤い弾幕が敵機に吸い込まれていく。

最初の敵機が火を噴いた。

二機目の翼が吹き飛んだ。きりもみしながら落ちていく。

三機目は方向を転換して逃げようとした。

トムが後ろにぴたりと付いてボタンを押した。

（何てあっけない空中戦だ・・・）

トムは拍子抜けした様に航路を元に戻した。

「前方十キロに陸軍基地！」

コンピュータが目標を告げる。

「巡航ミサイル目標5-22-2、発射」

トムの機体から下に釣り下がつて行つたミサイルが点火され、もの凄いスピードで飛び去る。

「巡航ミサイル目標3-55-66、発射」

2番機のマットが発射した。

彼らは戦火を見るために高度を上げ機体を斜めにした。

ミサイルが遠くで着弾し、格納庫に火柱が上がつた。

黒煙を吹く最初の軍事基地の上をトム達は飛び去った。

＊＊＊＊

「總統閣下！ ピンインの陸軍基地が襲撃されました！ アメリカ軍の戦闘機らしいです！ 『プルガサリ』に向かっているようです！」

ボクちゃんは頭に来た！

「ストレンジラブ！ 発射だ！ 奴ら目に物をみせてくれる！」
「ぐつぐつぐ・・・閣下！ 任せて下さい！ 立派に打ち上げますよ！」
ストレンジラブは机の電話を引つたくると、どもる様に怒鳴った。
・・・どいつも何もかもが演技臭い。

「い、いいか！ は・・・『白馬の王子様』、は、発射コード・・・
ぶぶぶ・・・B・O・K・U・C・H・A・Nだ！」

怒鳴り終わるとゆつくりと身体をひくつかせながら電話を置き、車椅子の背にもたれて機械人形の様にその気味悪く笑つた顔をボクに向けて肩をすぼめた。口からは涎を流していた。

トム達の乗る超音速のF22を、北朝鮮の対空砲は捕らえる」とが出来なかつた。

弾丸の発射の間隔が前時代的に長かつたのだ。砲台を回すのも人 力だつた。

ともかくも北朝鮮軍は、トム達の様に早く飛ぶ戦闘機は始めて見 たのだ。

後続の戦闘機も殆ど被害はなかつた。

たまに偶然に機関砲の玉に当たるぐらいだつた。

後続部隊は絨毯的に爆撃し基地を壊滅していつた。

敵の対空ミサイルも役に立たなかつた。へろへろと飛んだり、お互にぶつかつたり、どういう半導体を使つてゐるのか?ひょっとすると真空管かも知れないと、爆撃隊員は笑い合つた。

兵器が役に立たないと分かると、北朝鮮軍兵士達はちりぢりに逃 げ出した。

總統閣下への忠誠心などどこかに飛んでいた。食つために軍隊に入つた連中が多かつた。

農民に助けを求めた。しかし憎しみに満ちた農民達に囲まれ、銃 を取られ、石や棒で叩き殺された。

農民達は辛うじて仕える一石ラジオで韓国の放送を聞いてゐる者がいた。全世界を總統は相手に回したことと口々に伝えた。

朝鮮は古代から義民の国である。それを知る権力者は、様々な手

を使って人民の氣力を奪つてきた。今、農民達は生まれて初めての『希望』を懷いた。長い間忘れ去つていた感覚を。

トム達は遂に、『プルガサリ』が発射を待つチヨンドン基地に近づいていた。

コンピュータが衛星のデータを解析しミサイルの着弾地をロックした。

『プルガサリ』が破壊された後、この地は長く放射能汚染され立ち入ることは出来なくなる。ここに棲んでいる農民は悲惨な目に合ふだろう。

しかし、今は仕方がないのだ。許してくれ！

三機から最後の巡航ミサイルが打ち出された。このミサイルは特別製だ。

美しい曳光を引きながら、降魔の兵器は巨大なロケット口指して飛んだ。

急上昇するトムのヘルメットに映つたものは、小さな太陽であつた。

「『プルガサリ』が・・・破壊されました！核ミサイルの様です！」悲痛な報告が電信室から走つてきた通信兵によつて行われた。

金前日は青くなり拳を握りしめぶるぶると震えだした。

何と叫びたんだー。ボクちゃんの夢が…びびって突然、世界中がボクを虐めに来たんだー。今まで腫れものに触る様だったのこ…。

「總統！」これは降伏を…

ボクは、運動音痴に見える姿態から想像もつかないぐらいの早業でポケットの小型拳銃を抜き、そいつの額を打ち抜いた！

「ああ！軍事大臣！…」

「降伏！ボクに降伏しようと…そつ、言いたい奴は前に出る…！」

ボクは気が違った様に吼えた。それでもしないとボクを裏切ろうとする奴が出る…。

「總統閣下…」

「何！」

ボクは声のする方に拳銃を向けた。そこにはあの車椅子のストレングジラブがいた。

「な…・・・何が言いたい？お前はしつけられたー。ロケットを、…・・・原子爆弾を飛ばせなかつたな！」

ボクが拳銃を彼の額に向けても彼はにやにや笑つたままだ。そして首を竦め、手の平を返した。

「え…・・・じゃ、あれは…・・・

「ぐつぐつぐ…・・・總統閣下。ミサイルの名前は『ブルガサリ』じゃなくて、『白馬の王子様』ですよ」

閣僚達があおつとどよめいた。

「丁度今、隣の基地から『王子様』は発射しました

「ストレンジラブ君！君は…・・・やつぱり天才だ！」

ボクは彼をぎゅうっと抱きしめてしまった。

11 また逢つ日まで

アメリカの軍事衛星はミサイルの発射を感知した。
中国のそれも液体燃料の燃焼を確認した。

「大変だ！間に合わなかつた！ミサイルが発射された！」

国際会議室は大騒ぎになつた。

「北陸、北海道、イージスのパトリオットの発射用意だ！」
粗相は力無く命令を下した。遅かつた。しかしやることはやつた。
この後、世界が滅びるとしたら、せつかく歴史に刻んだ名前がどうなるか気がかりだ。

「首相、各国の迎撃ミサイルが発射されます！」

彼はミネラルウォータをがぶと飲んで、椅子に深々ともたれ込んだ。

「アラツソ」

「各国の迎撃ミサイルが飛んできます！」

まだ世界中に張り巡らせたスパイ網は生きている様だ。
ボクはストレンジラブに言った。

「ボクちゃんのミサイル、落とされないよね？」

ボクは本来の口調に戻つていた。閻僚はびつくりして隣の者と目を見合わせているが、ボクの持つた拳銃がいつそちらを向くか心配の様だ。

イスラエルとイラクの戦争でパトリオットがかなり使えるということを知っている。迎撃ミサイルも沢山来れば当たる確立は高い！

「總統閣下……安心を」

「この男は本当に頼もしい天才だ。ボクなんかがこの後、何千年生きても巡り会えないかも知れない。邂逅だ！」

「ボクのミサイル、凄いんだよね？ストレンジラブ君が作ったんだから！」

彼は誇らしげに微笑んで、ピエロがやるよつた、手を広げてお辞儀する様な仕草を車椅子の上でした。

「で……どうして奴らのミサイルをまくんだ？」
ストレンジラブは鼻をひくひくさせて答えた。

「『白馬の王子様』には特別の推進装置が付けてあります」
「へえーっ！……何、それ？」

ボクちゃん大はしゃぎだ。こんな可愛い笑顔を閣僚に見せるのは始めただろう。

「推進エンジンに水爆を使うのです」

「え……？」

ボクや官僚達は吃驚して彼を見た。

「總統閣下、『光子ロケット』って分かりますか？」

「こうし……ロケット？」

「水爆を利用して推進し、理論的には光速のちょっと手前まで速度が上がります」

「うわっ…SM…じゃないSFの世界みたいだ…」
周りの皆がぱちぱちと手を叩く。

ストレンジラブは得意満面で続けた。

「水爆をロケットの後方で爆発することにより、迎撃ミサイルなど寄せ付けません。後ろから来るものは跡形もなく熔けてしまうでしょう」

「わはは！愉快愉快！…・いつ点火するの…？」

ストレンジラブは腕時計を見た。そして笑って、
「丁度我々の上です…・・そろそろ…・・・」

その場の空気が超低温になつた。そして氣のせいか、『ジジジ』という振動が床を伝つてくる様な感じが…・・・

「うわーっ！」

全閣僚達が先を争つて会議室から逃げ出そつとした。馬鹿め！どこに逃げたつて同じだ！

ボクは数発、ボクに背を向けて逃げ出す閣僚達に向かつて拳銃を打つた。数人の閣僚の背中に当たつた筈だが、そのまま走り出でしまつた。

その場に残つたのは、ボクと…・・ストレンジラブの一人だけだつた。

ストレンジラブは相変わらず口の端を押し開けて笑つた顔を作つている。いや、本当に笑つてているのだろう。

上空では『白馬の王子様』が光子エンジンの点火を始めていた。
迎撃ミサイルがすぐ後ろに迫つている。

しかし『白馬の王子』のお尻がぴかっと光ると、その閃光は徐々に大きくなり、後方に伸びた。ぐんぐんとスピードを増し、迎撃ミサイルは熔けて落ちていく。

閃光がボクちゃんがいる総統官邸の上に届いた。衝撃波が次ぎに来る。

ボクちゃんのおうちは核攻撃に耐える様に頑丈に作つてある・・・でもこの間、手抜き工事が発覚して工事に関わった全ての連中を縛り首にしたばかりだつた。この国の連中は・・・指導者のためにさえまともな仕事が出来ないのだ。

ほんの数秒、この地下会議室は持ちこたえるかも知れない・・・

凄い地鳴りの様な衝撃が会議室を襲つた。調度品が倒れ、硝子が割れる。そして天井の建材が剥がれ、瓦礫となつて落ちてきた。

円卓が天井から落ちたコンクリートの塊で潰れた。真つ暗になり、バッテリー駆動の補助電源が通路灯を付けた。ボクは建材の出す埃に咽せた。

もうもうとする埃の中で、ストレンジラブが車椅子からすくつと立つた。

そしてボクに向かつて右手を斜め上に上げ、ブーツの踵をかちんと付けて敬礼した。

「ハイル！総統閣下！」

ストレンジラブの顔と言つたら、夢を叶えた子供の様に嬉々としていた。これがやりたかったと言わんばかりに。

そして建物が崩れ落ちる轟音の中でボクに言つた。

「總統閣下……愛してました……」

彼の上に大きな瓦礫が落ちて、彼はぐしゃぐしゃになつた。酸素不足で意識が朦朧としてたけど、ボクはやることは分かつていた。

拳銃を持ち上げて……何て重いんだ……自分のこめかみに付けた。

＊＊＊＊

その後、世界各国の首都に水爆が落ちていった。議事堂を田掛けで寸分違わぬ正確さで。

ボクちゃんのお話はこれで終わりだよ。
また逢つ日まで。

了

この物語がいつの日か現実になりません様に。

引用

「博士の異常な愛情」
「ターミネータ」
「羊たちの沈黙」
「ハンニバル」
「孫子」

イメージ
「プルガサリ」
「世界大戦争」
「トップガン」
(東宝)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5076g/>

ボクは白馬の王子様（北の脅威）

2010年10月11日05時20分発行